

## 渋沢栄一と徳川家康

『青天を衝け』時代が違う徳川家康が出演し続ける理由とは？

<https://www.mapion.co.jp/news/column/cobs2316128-1-all/>

M.マイナビニュース



俳優の吉沢亮が渋沢栄一役で主演を務める大河ドラマ『青天を衝け』（NHK 総合 毎週日曜 20:00～ほか）で、時代が違う徳川家康（北大路欣也）がなぜずっと出演しているのか、1916年に出版された渋沢栄一の代表作『論語と算盤』を読めばその理由がわかる。

栄一（吉沢）が銀行頭取になった。10月31日に放送された第33回「論語と算盤」（脚本：大森美香 演出：田中健二）では“近代日本経済の父”と呼ばれる栄一が「経済」をどのように捉えていたかが描かれた。それはサブタイトルそのものの「論語」と「算盤」の融合である。

渋沢栄一の代表作『論語と算盤』は渋沢の談話を口述筆記してまとめた本で、現在世の中には、漢文で書かれたままのものから読みやすい現代語訳、さらに読みやすい漫画版まで様々な形で出版され、いまだに多くの人たちに読み継がれている。

孔子の説いた「論語」（これもまた弟子が孔子の言葉を書き記したもの）は人がいかに生きるべきか——栄一の認識によれば「己を修め 人に交わる常日頃の教えが説いてある」もので、「算盤」は世の中をお金で動かしていく経済活動の象徴。本来「論語」と「算盤」は交わらないが、渋沢は交わせようと考えていた。利益追求に走り過ぎることなく道理の範囲で行い、経済活動は世のためになることをするべきと。

漢文だとわかりにくいので、現代語訳のほうで紹介しよう。例えば渋沢栄一は「～『商才』というものも、もともと道徳を根底としている。不道徳やうそ、外面ばかりで中身のない『商才』など、決して本当の『商才』ではない」と説いている（現代語訳『論語と算盤』（[M.筑摩書房](#)）より）。

栄一がなぜこういう考え方をするようになったか。『青天を衝け』では家庭環境の影響として描いているように見える。長らく丁寧な栄一の父や母の慎ましい生き方と彼らの言葉（例

えば「あんたがうれしいだけでなく、みんながうれしいのが一番なんだで」)を描いてきた。栄一が両親の道徳的な考えに育てられたからこそ、折につけ嘔み締め何があってもそれを忘れることなく行動の指針にしてきたのだろうとドラマからは読み取ることができる。

ちなみに、大隈重信(大倉孝二)に「人の話は我慢して聞け、大声で怒鳴るな、せっかちは厳禁、嫌いな人ともきちんと付き合い」と助言の手紙を書いた五代友厚(ディーン・フジオカ)が、大久保利通(石丸幹二)と碁を打ちながら「彼を攻めるには我を顧みよ」と言っているのは、「囲碁十訣」は唐の時代の碁の [M名手](#)・王積薪による囲碁十カ条。昔の日本人は歴史ある中国の偉人の言葉を勉強していた。渋沢栄一はいち早く欧米の技術や考えを学んで取り入れながらも東洋の教えも捨てがたいと考えていた。彼にとって近代化＝西洋化では決してなかったのである。

かの徳川家康の教え「神君遺訓」にも孔子の影響があることを渋沢栄一は『論語と算盤』で書いている。『青天を衝け』に時代の違う徳川家康が出続けて来たのはこのために違いない。でも、この回、残念ながら家康は出てこない。五代の「大声で怒鳴るな、せっかちは厳禁」なども元をたぐれば孔子の教えから来ているのではないだろうか。

徳川家康はこの回に出て来ないが、徳川慶喜(草なぎ剛)が登場した。栄一が [M静岡](#) に慶喜に会いに行くと彼は洋装の狩猟ルックでお出迎え。なかなかお似合いだし、すっかり社会の中心から離れりタイアした人の雰囲気が見事に出ている。

慶喜の妻・美賀子(川栄李奈)は栄一に、円四郎の妻やす(木村佳乃)が尋ねて来て今の世を憂いていったと告げる。新しい時代が来たものの民の生活がよくなっていない。命を賭けて国を良くしようとしてきた人たちの想いを引き継いでいないという嘆きを聞いた栄一は、自宅に帰ると改めて「論語」を読み返す。「途中で尊皇攘夷にかぶれてしまって(論語を読まなくなった)」と [M千代](#)(橋本愛)に自嘲気味に言う栄一。外国で、婦人たちが貧しい人のための義援金集めをしていたことと母の事を重ねて思い出し、自らもまた、人の役に立つことにお金を使おうと思うのだ。やはり母の道徳的教育の影響は大きい。

新しい時代になっても過去に新しい世の中と人々の幸福のために闘って命を落とした者たちのことを栄一は忘れない。明治9年、日本初の私立銀行・[M三井](#)銀行を作った三野村利左衛門(伊ッセー尾形)は、「あまりにも金中心の世の中になってきたことですよ」とこの時代を警戒し、後を栄一に託し翌年亡くなる。彼の心配は当たり、明治10年、西郷隆盛([M博多華丸](#))が命を落とした西南戦争の戦費は4,200万円で税収は4,800万円。「馬鹿らしい」と栄一は呻く。大久保利通も亡くなり、多くの屍を超えて栄一はひとり歩いていく。

[M横浜](#)の蚕卵紙問題に当たって「10年越しの俺たちの[M横浜](#)焼き討ちだ」と燃える喜作(高良健吾)と尾高惇忠(田辺誠一)と栄一の3人が松明を掲げ、亡くなった真田、長七郎、平九郎たちのことを思いながら空を見上げる。亡くなっていった者たちを鎮魂し、生き残った栄一、喜作、惇忠が新たなターンに向かっていくターニングポイントの回だった。

<https://www.cinematoday.jp/news/N0121328>

実業家・渋沢栄一を主人公に、幕末から明治期を描く大河ドラマ「青天を衝け」(2月14日よりNHK総合ほかにて放送)に、[北大路欣也](#)演じる徳川家康が登場することが明らかになった。27日に行われた本作のリモート会見で、制作統括の[菓子浩](#)と脚本家の[大森美香](#)がその真意を語った。

[草なぎ剛](#)、[玉木宏](#)らも！1回&2回場面写真

生涯で約500の企業を育て日本資本主義の父と呼ばれた渋沢([吉沢亮](#))の生涯を描く本作。初回の冒頭、徳川家康が登場し、いわばナビゲーターとしての役割を担う。渋沢が生まれたのが1840年。その時代に家康が登場するというのは完全なるファンタジーだが、脚本を担当した大森いわく「渋沢栄一さんが生きる江戸時代から現代までを俯瞰して見られる方が欲しいと思った」とのこと。「ナレーションでもよかったのですが、幕末で江戸時代を閉じるという意味では、どうやって江戸幕府を開いたかということがとても大事。そこを俯瞰して見るにはどうしたらいいかと考えたとき、家康さんが適任だと思ったんです」と述べる。

2023-04-09

[【家康の謎】家康が信仰していたのは何宗？](#)

[榎本秋の「家康の謎」](#)

<https://blog.kojodan.jp/entry/2023/04/09/093000>

戦国武将たちは総じて信仰心が篤い。

織田信長は桶狭間へ出陣するにあたって熱田明神へ参詣したし、上杉謙信は毘沙門天を信仰するあまり自らをその化身と信じるに至った。謙信自身やそのライバル・武田信玄をはじめとして出家後の名前で広く知られている武将・大名も多い(それぞれの出家前の名は「上杉(長尾)景虎」と「武田晴信」)。

また、この頃には「天道(てんどう)」と呼ばれる、世界の摂理を司どる存在も広く信仰されていたようだ。

では、[家康はどんな宗教を信仰していた](#)のだろうか。

松平氏の菩提寺は今でも愛知県岡崎市にある成道山松安院・大樹寺(だいじゅじ)だ。この寺は当然仏教であり、宗派は[浄土宗](#)。鎌倉時代に法念が開いた宗派であり、「南無阿弥陀仏」

の念仏を唱えれば極楽往生できると訴えて多くの信徒を獲得したことでよく知られている。大樹寺はそもそも開いた時点から松平氏との縁が深い寺だ。

ある時、松平氏の第四代当主である親忠（ちかただ）が、合戦で討死した死者たちが泣き叫ぶ声がずっと聞こえてしまって苦しむ、ということがあった。しかし、勢誉愚底（せいよくぐてい）という僧侶に七日七夜に渡って念仏を唱えてもらったことでこの声から解放され、その後彼に大樹寺を開かせた、という。

だから家康のもともとの宗派は当然浄土宗である。彼と大樹寺にも有名なエピソードがあるが、これはのちのち紹介することにしたい。

注目したいのは、どうも家康は晩年になって宗旨替えをしたらしい、ということだ。

そもそも、戦国大名や戦国武将はブレンや外交担当として、しばしば僧侶とのつながりを持っているものだ。

中でも晩年の家康のブレンとして活躍した僧侶として、天台宗の南光坊天海（なんこうぼう てんかい）と、禅宗の金地院崇伝（こんちいん すうでん）の二人がいた。

特に、家康が天海から受けた影響は非常に大きなものがあり、彼との出会いを経て天台宗に傾倒するようになったようだ。

とはいえ、家康は全く浄土宗の信仰を捨ててしまったわけではないらしい。

松平氏の元々の菩提寺が三河の大樹寺であることはすでに触れたが、江戸で家康の、そして徳川氏の菩提寺となったのは増上寺——その宗派もまた浄土宗である。また、家康は遺言において「葬式は増上寺で、位牌は大樹寺に」と言い残している。

自分の死は松平（徳川）代々の流れを汲んだ形で飾りたい、というのが家康の最後の望みであったわけだ。

なお、今紹介した家康の遺言は守られているが、同時に言い残していた「亡骸は久能山に」は守られていない。

一度は埋葬されたものの、掘り起こされて日光山へ移されたのだ。天海が行ったものとされる。また天海は日光山に眠る家康を自らの信仰に基づいて「東照大権現（とうしょう だいがんげん）」として神格化もしている。

結局、浄土宗の増上寺と、天台宗で天海が開いた寛永寺が徳川家の菩提寺として、江戸時代を通して重要な位置を担っていくことになったのだった。

そもそもこの時代の人々にとって宗旨替えや複数の宗派を信仰することがそこまで特別だったかという「あまり気にしなかったのでは」と思われる。

例えば上杉謙信のケースだ。彼が生まれた長尾家の菩提寺は林泉寺（曹洞宗）だが、上洛した時に大徳寺（臨済宗）の徹岫宗丸に参禅して宗心という法名まで与えられている。